

文学部は、**教育学科、英米文学科、フランス文学科、日本文学科、史学科、心理学科**の6学科で構成されている。ひとつの学部として位置づけられてはいるが、各学科の名称からもわかるように、各教育課程は、学問分野の大きく隔たる内容により構成されている。以上の理由により、本学部執筆部分は大部となっているが、各学科における自己点検・評価を尊重しつつ、報告書を作成したことをあらかじめ申し上げておく。

教育学科及び英米文学科においては昼間部と、夜間部である第二部が設置されており、教育学科及び英米文学科の本文の記述において、昼間部についての内容の場合は、学科名を記し、夜間部である第二部についての内容の場合は、学科名の前に「第二部」を記した。また、昼間部、第二部に共通する内容の記述の場合は、「本学科」と記した。

(例) 教育学科の記述において

「教育学科」……昼間部教育学科についての記述を示す。

「第二部教育学科」……夜間部である第二部教育学科についての記述を示す。

「本学科」……昼間部教育学科及び第二部教育学科に共通する記述を示す。

[到達目標 学士課程の教育内容・方法等]

学部全体

本学に入学した学生は、「キリスト教概論」でキリスト教精神について学び、青山スタンダード科目において幅広い教養と学問に対する姿勢を身につけつつ、同時に、各学部学科の専門科目を学んでゆく。文学部においては、先に記した理念に基づいて、基礎的教養と各専門分野の学問によって、**人間を多面的・多角的に理解する力を持った人材を育成**しようと努めている。

詳しくは以下に見てゆくとおりだが、伝統的に形成されてきた専門分野の学問をさらに発展させながら、新たな方向性を見出してゆく動きが、それぞれの学科に見られる。少人数制の伝統を生かして、学生1人1人にきちんと目を向けた暖かい教育を守ってゆきながら、新たな学問の方向や、新たな教育方法に、果敢に挑戦してゆかねばならない。具体的には、各学科の教育内容の検証を深めつつ、地に足のついた改革を遂行してゆく必要があろう。また、国際的な人材の育成をめざして、教育・研究両面での海外との交流をますます深めてゆくべきである。

教育学科

本学科では、狭い専門主義的な価値観を超えて、「**人間の成長・発達・形成についての学生の多様な関心を、教育学の学問的な手続きを踏まえた、より説得力のある知識としてその理解を深めさせ、併せて教育の問題を広く日本や世界の歴史・社会・文化の問題として理解させ、その構造や機能を明らかにする科学的な探求心を修得させること**」を教育目標としている。

この目標を達成するために、教養教育の青山スタンダード科目（第二部教育学科は全学共通科目）と外国語科目により学問領域全体を幅広く深く学びつつ、専門教育として、教育学に関する学術的内容から実践的内容までの多様な教育内容の学科科目を中核的に学び、加えて教育学に隣接する学問領域に関する教育内容（文学部共通科目、他学部・他学科の学科科目）を、学科科目と併せて自由選択科目として学ぶことができるように教育課程を整えている。

本学科として、この教育課程の一層の改善ならびに学生の興味や関心を進展させて、学生が主体的に学修に取り組むことができるような指導体制の工夫に取組み、より有機的かつ体系的な教育課程及

び指導方法への改善をめざしている。

英米文学科

英語は、現在、事実上、世界語の地位を占めているが、本学科では、学生に対して、まず、この**英語の運用能力を徹底的に鍛える教育**を行っている。こうして培われた英語運用能力を基にして、**英文学、米文学、英語学、コミュニケーションの4つの専門分野**について理解を深め研究を行うことができるように指導をしている。

まず、英語運用能力の養成について述べると、英米文学科においては、**いわゆる4技能といわれる、英語を読み、書き、聞き、話す能力を涵養**するために、それらを総合して教授する**IE (Integrated English) プログラム**を設置している。このプログラムは1コマ90分の授業を2コマ連続して使って行われる授業で、4技能の訓練を万遍なく織り込んだ共通授業計画を用いて、おもにネイティブスピーカーの教員によって教授されるものである。加えて、英語のライティング力とリスニング力をさらに確かなものにするため、IEライティング・IEリスニングの授業も併置されている。第二部英米文学科においては、**コミュニケーション・イングリッシュ**の授業において、単に英会話だけではない、英語のトータルな習得をめざして、ネイティブスピーカーによる授業を行っている。英米文学科、第二部いずれも上記以外に、英語の講読を行う授業を設置し、広く英米文学のみならず、時事的英語散文やエッセイなども読解する訓練を行っている。

次に、英米文学科における専門科目について述べると、上述の4つの専門分野それぞれについて、1・2年次における概論・基礎演習などでの専門分野への導入の後、3・4年次では講義科目としての特講と少人数クラスでの演習において、専門分野を深く学ぶことになる。

それぞれの専門分野での教育内容を概観すると、英文学と米文学では、**英国文学史及び米国文学史、詩、小説、演劇、散文、批評、ジェンダー論**などを教授している。英語学の分野では、**音声学、音韻論、生成文法、機能文法、認知文法、形態論、語形成、意味論、歴史言語学、英語文献学、心理言語学、英語教育学**などを教授している。コミュニケーションの分野では、**異文化間コミュニケーション論、身振りを含む対人コミュニケーション論、コミュニケーションとしてのパフォーマンス論、通訳・翻訳学、言語情報論、社会言語学**などを教授している。

本学は、そもそも、キリスト教精神にのっとり、社会に対して貢献できる人材を育成するため、学生は、まず、「キリスト教概論」にてその精神を学び、次いで、「青山スタンダード科目」にて、言語、人文科学、社会科学、自然科学などの幅広い教養を修める。その基礎に立って、文学部の学生は、各学科の伝統ある専門性の高い学問へと導かれる。その中で、本学科の学生は、上述したような専門分野を学ぶことになる。こうして、本学科は、英語という世界語を軸にした教育を行うことによって、学生が、英語圏に限らずさまざまな国々の社会・歴史、及び文化・芸術などについて、国際理解を深められるようになり、ひいては**彼らが日本そして世界にとって有為な人材となるように**、日々その教育課程について工夫を重ねている。

フランス文学科

本学科では、1962年の創設時以来、一貫して「**フランス文学・思想を通じて人間性の探究をめざす**という学科創設以来の理念を追求」(『青山学院大学の現状と課題1996年度自己点検・評価報告書』pp. 32-33) し続けており、今後もこの目標に変化はない。その達成をめざして、**幅広い教養と深い専門的知識を備え、同時に適切な判断力と滋味豊かな人間性とを備えた人材を、社会に送り続けることを常にめざしている**。この理念の実現のためには、まだ揺籃期にある青山スタンダード科目群及び再

整備を要する文学部共通科目と、教育課程面で徐々に形の整いつつある専門科目とを、有機的・整合的・体系的に関連づける不断努力を重ねていかねばならない。また、フランス語の文学や言語学以外にも、学生の知的関心が多様化している現状を踏まえ、カリキュラムの改変・充実をさらに進め、すべての前提となる語学力の向上に資する改革を重ねる必要がある。具体的には、長年の懸案であった独自の「青山文法教科書」の作成に、早急に着手せねばならない。また、高い教育効果を得るシステムをさらに整備し、「詰まった頭よりも、むしろ良くできた頭」(モンテーニュ)を、1人でも多く社会に、ひいては国際社会に送り出したいと祈念している。

日本文学科

本学科では、単なる知識の寄せ集めではなく、総合的な日本文学の研究理解から、普遍的な人間性へと目をひらき、心をひらくことのできる人間の育成をめざし、学生が自ら考え、学ぶことのできる教育をめざしてきた。そのためにカリキュラムの改革を重ね、1年次から「文学研究法」等の科目において研究の目的や方法について自覚的な思考を促し、幅広く開講している講義科目において知識を蓄えると同時に、数多く設置している演習科目において調査と思索を繰り返し、4年次の卒業論文に至るように、きめ細かい工夫をこらしている。また、最近では、学生の興味の変化に対応して、従来の正統的な文学の枠からはみ出すような領域にも進み出た科目を開講している。日本文学・語学への興味のあり方は、決して一様ではない。上記のような努力を今後も重ねると同時に、青山スタンダード科目群や、文学部共通科目との連携を視野に入れつつ、学生が多様な角度から日本文学・語学の魅力を理解して自ら学ぶことのできるように、さらなる努力が必要であろう。そうした不断努力によってこそ、豊かな知識と感性、そして思考力を有する人材を育成してゆくことが可能となるであろう。

史学科

本学科では、創設以来、まずは幅広く歴史を学び、徐々に専門へ移行していく、というプロセスをとってきた。それは、「国際性豊かな本学において、とくに世界史的視野をもった歴史学の新しい研究・教育の場」と位置づけられてきた史学科設立の理念を反映したものであった。たとえ、高校段階で日本史、あるいは世界史のみを学んできた学生にとっても、世界の歴史の流れ、あるいはその中で日本の歴史のあり方を国際的な視野をも含めて考えていけるようにするためであった。そのため、本来、日本史・東洋史・西洋史・考古学の各概説が1年次の必修におかれてきたが、それに加え、芸術史概説を新設することによって、さらにその幅を大いに広め、学生の関心に十分答えられるような形にカリキュラムを進化させてきた。また、従来1年次におかれていた史学入門を、各コースの基礎演習として発展的に位置づけ、すでにコース選択がすすんでいる2年次に設定し直すなど、より、専門的な関心にも対応できるように改めてきた。与えられたコマ数の問題もあって、未だ必ずしも十分な開講数とはいえないまでも、幅広い観点から各専門課程へ、という理念は、さらに大きな可能性を秘める形で改革されてきており、今後とも、必要に応じた再編などが模索される必要もあろう。そうした中から、史学科が本来目的とした、**個々の未来への展望を切り開くことのできる人材を社会へと送り込んで行く**ことも、より積極的な意味を持ちうると考えている。

心理学科

本学科の目標は、「**問題解決志向の人間の養成をめざす**」(『学部パンフレット〔文学部〕』p.69)ことである。しかし、この目標を少しでも実現するためには、「心」に関する豊かで多様な視点からの理解が求められる。その一方で心理学は高等学校までの教科科目には独立して存在しないし、中等教育

における教科書に載る著名な心理学者も多くない。さらにすべての人が、良くも悪くも「民間心理学者」として心に関する知識や見識を備えている。このような事情から、心理学を専攻するためには大学教養課程に相当する青山スタンダード科目と連携をとった入門的な専門科目群の役割が重要になる。2003年度以降に実施された青山スタンダード科目群は、揺籃期を脱しつつある段階で一層充実が望まれ、徐々にその機能と内容を整備しつつある。

専門科目群は、教育学科から独立して以降、広範な科目を設定している。産業、教育、医療など広く実践的な場で力を発揮するよう、応用心理学科目群の充実をめざしている。一方これらの専門科目がその領域だけの狭い範囲で学生が自己完結しないように論理性、明証性、公共性を確保することに留意している。

〔到達目標 学生の受け入れ〕

学部全体

基礎的教養と各専門分野の学問によって人間を多面的・多角的に理解する力を持った人材を育成することをめざす文学部の教育目標に従って、文学部においては、大学教育を受けるに足る知識水準に達していると同時に、知的好奇心や豊かな創造性、積極的な行動力を有する、個性ある人材を求めてきた。そのために、選抜方法については主として各学科の創意工夫に基づきつつ、多様な形態の入学試験を行うことにより、さまざまなタイプの学生を選抜すると同時に、個性ある人材を求める姿勢を、入学試験そのものによって受験生にアピールしてきた。具体的には、以下、各学科に即して述べるように、一般入試における複数方式の試験の実施や、各種の推薦入試、留学生や編入生、既卒者、科目等履修生の受け入れ等々である。しかし、大学全入時代を迎え、大学入試がますます多様化する時代にあって、さらに多様な形態の受け入れ方法を検討してゆく必要がある。学力水準を保ちつつ、意欲に富む個性ある学生を受け入れることができるよう、さらなる努力が必要である。

教育学科

本学科の理念・目的及び教育目標に適う人材を育成するために、多様なタイプの学生が相互に学び合いかつ協同することが必要である。

多様なタイプの学生の受け入れを前提として、高等学校卒業の学力がある学生であり、人間の成長・発達・形成について深い関心を持ち、教育の問題を幅広い視野から探求し、教育学と隣接分野について学ぼうとする知的好奇心と意欲がある者、または心豊かな社会の実現と自らの向上をめざし、社会のさまざまな分野で積極的に行動していこうとするために、人間に対する理解を深め、教育学を学ぼうという強い意欲がある者の受け入れを目標としている。

英米文学科

本学科の目標は、「国際的な視野をもって社会に貢献できる個性的で創造性豊かな人物の育成」にある。この目標を達成するために、各種の多様な入学選抜方法を実施することによって、個性あふれる学生を受け入れることを試みている。英米文学科とならんで第二部英米文学科を併設し入試を実施していることも、本来この目標に根ざしたものである。

入試の制度に関して具体的に記すと、一般入試では1996年度以降AとBの2方式を英米文学科第二部ともに導入している。内部推薦入試として、青山学院高等部より学生を入学させている。帰国子女

及び留学生も英米文学科第二部英米文学科ともに募集している。また英米文学科のみだが、過去に入学の実績のある高校を指定校として、学校長の推薦のある者を受け入れている。第二部独自の入試形態として、従来からの社会人入試、スポーツに優れた者の入試に加え、2002年度より英語資格取得者自己推薦入試を導入している。編入学・転部・転学部・転学科入試を英米文学科第二部英米文学科ともに実施している他、青山学院女子短期大学よりの推薦入試や大学既卒者のための学士編入、科目等履修生の試験も実施している。以上のような多様な入試の形態をおくことによって、さまざまなバックグラウンドを持つ知的好奇心に富んだ学生を受け入れることを狙っている。

フランス文学科

本学科は、1962年の創設時以来、常にフランス文学や文化、ならびにその研究の大前提となるフランス語の習得を通して、教養に富む柔軟な人柄と適切な判断力を有し、かつ、滋味豊かな国際人を育てることを、理念として掲げてきた。学生の受け入れも、この理念に沿う形でなされてきており、今後もこの受け入れ態勢をさらに有効に機能させねばならない。具体的には、一般入試（A・B）、指定校推薦、外国人留学生、編入学生、転学部転学科生など、極力多様な人材を集めつつ、同時に、その学力や人柄の点で、一定以上の質を維持する努力を続けねばならない。こうして集まった多様な母集団の中における学生同士の切磋琢磨が、入学後の知的・人格的陶冶に資することは、間違いないからである。この目標を実現するためには、先ず、大学全入時代を念頭に置き、約5年を目途に指定校推薦制度のさらなる充実と活性化を実現すると同時に、中長期的には、フランス文学科の定員の削減といった思い切った施策をも議論の俎上に載せる必要がある。受け入れた学生が、社会にとって有用な国際人へと育つための教育環境作り（少人数の授業など）といった観点からも、以上の議論を避けて通ることは不可能である。

日本文学科

本学科では、日本の文化と言語について幅広い知識と深い理解力を身につけることが真の意味での国際人を育成することにつながるという考えから、日本文学・日本語に対して深い関心を持っている学生を受け入れたいと考えている。同時に、単なる知識の寄せ集めではなく、総合的な日本文学の研究理解から、普遍的な人間性へと目をひらき、心をひらく学生を育てたいという考えから、選抜に際しては多様な角度から意欲と適性を判断し、多様な個性のある学生を受け入れようとして、選抜方法に工夫をこらしてきた。現在では、一般入試にA・B2つの方式を設ける他、推薦入試・特別入試・編入試験などを行っている。また、留学生試験を実施して、海外からの留学生を受け入れている。学力の水準という意味での質を確保しつつ、さらに多様な学生を受け入れてゆくために、いかなる方法があり得るのかを常に模索することが、今後とも必要であろう。

史学科

本学科は、「世界的視野をもった歴史学の新しい研究・教育の場」の実現をめざして設置された。この目標達成のために、一般入試、指定校推薦入試、帰国子女及び外国人留学生入試、併設校推薦入試、スポーツ推薦入試、編入学・転学部・転学科入試・学士編入など、多種多様な入学選抜方法を実施して、歴史に深い興味と関心を持つ多様な個性の学生の受け入れを図っている。さらに個性豊かで向学心のある多様な学生を受け入れるためには、センター入試の受け入れや社会人入学などをも視野に入れるべきであろう。

心理学科

本学科は、2001年の創設以来、「『心の専門家』の養成機関として、心理学を抽象的な学問としてではなく、世の中に役立つ具体的な知恵や実践的技術としての修得に重点をおく、まったく新しい『学びの場』を提供したい」（『学部パンフレット〔文学部〕』）と考えている。すなわち、心理学に直接結びつくイメージとしては、アームチェアに座って、また実験室に閉じこもって得られる知識だけではなく、人々の生活の場に根ざした実践知を修得することに重点をおく目標を立てている。この目標を実現するため、調査、実験、実習形式の参加型学習を本学科はとくに重視している。このような青山心理学にふさわしい人材を広く求めるための入学者選抜を検討してきた。

〔到達目標 教員組織〕

学部全体

本学部は、専任教員だけでも助手を含めれば120名を越える、大きな組織である。その教員組織は、昼間部の6学科と第二部の2学科とに分かれ、各々が対象としている学問分野、そして教育上の担当分野を十分にカバーできるように構成されている。このように、**組織全体が大きいことと、各学科がそれぞれに理念や伝統を有し、独自の専門分野を有することにより、本学部の教員組織の運営は、各々の学科の自立性に委ねられている面が大きい。**教員の募集や任免・昇任については、とりわけそうした面が強いといえるだろう。これは本学部の組織の有する性格上、必然的なことであり、そうしたあり方は現在まで有効に機能し、年齢構成その他においてバランスのとれた教員組織を形成してきたといえよう。そうしたあり方を抜本的に変える必要は認められないが、各学科の判断が独善に陥ることを防ぐために、**学部全体による議論を形骸化させないこと、また、より開かれた形で議論や判断基準を示してゆくように努力することが必要**となろう。

教育学科

本学科の理念・目的及び教育目標に基づいた教員組織として、乳幼児期から老年期にいたる人間の発達・学習・社会化・成熟といったライフサイクルのそれぞれの段階で営まれる人間形成に関するさまざまな課題を、教育学及び隣接分野における学問分野の先行研究と最新の研究成果を踏まえて、科学的・人間学的・総合的に教育と研究ができる組織をめざす。

具体的には、生涯にわたる人間形成に関するさまざまな問題や課題について、教育学及び隣接諸科学の知見に基づき総合的に教育・研究するための教員組織であるとともに、教育学の基礎理論から実践的な知識や技法にかかわる人間形成学、比較教育文化・発達社会学、学校教育学、臨床教育学及びメディア・コミュニケーション学の5つの分野にゆるやかに構成された教員組織としても、それぞれの固有領域における教育と研究を科学的・人間学的・総合的に発展させ深化させることを目標とする。

併せて、教育学の基礎理論から実践的な知識や技法の習得を基盤にして**教育の現代的課題に対応できる教育職員（幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び司書教諭）を養成する課程ならびに現代社会における人間形成、文化、情報についての専門職業人（司書、社会教育主事、学芸員）を養成する諸資格課程を支える教員組織**が引き続き維持できることも目標とする。

英米文学科

本学科は、その専門領域として、英文学・米文学・英語学・コミュニケーションの4つの分野を教

授しているが、教員組織としては、それぞれの分野の中の専攻を十分考慮して、34名の教員を配置している。これは、英米文学でいえば中世から現代に至るすべての時代を、詩・小説・演劇・批評等のほぼすべてのジャンルについて教授し得るということであり、英語学でいえば、音声学・音韻論はもとより統語論・意味論・歴史言語学・英語教育学などの幅広い分野をカバーしているということであり、コミュニケーションでいえば、異文化間コミュニケーション論・対人コミュニケーション論・パフォーマンス論・通訳翻訳論・言語情報論・談話構造論などの幅広い人間のコミュニケーション活動についての研究分野を網羅しているということである。

このように本学科は、**英語関係の学科としては、およそ考え得る限りの幅広い専攻分野の教員を擁して、専門性の高い教育を行っている。**

専任教員が退職した場合は、その後任として、常に、学科全体の大局的見地から、最も必要とされる専門分野の教員を補充している。例えば、本学科が専門分野の1つとしてコミュニケーションを設置してから10数年を数えるが、その間、英文学・米文学・英語学の分野から退職者が出ても、補充された教員は必ずしも同じ専門分野の教員とは限らなかった。大局的見地から、適宜コミュニケーション専攻の教員を補充し、コミュニケーション分野の充実を図ったのである。

本学科の専任教員の年齢構成については、現今では50代・60代に比重があり、40代と30代が少ない。20代の教員はいない。ある程度の若返りが必要である。

本学科は、専任教員は、広く多様な専門領域をカバーする人材を得ているが、まれに欠ける部分は兼任教員を当てている。したがって、欠ける分野がないような教員の補充が望まれる。

本学科は、既に実績のある英語教育を、さらに確かなものにするため、**多数の外国人教員を配置**している。しかし、専任の外国人教員は、兼任外国人教員に較べて遥かに少数であるので、さらに人的拡充が望まれる。

本学科の専任教員の募集・選考基準・任免・昇任については、それぞれの人事案件の年齢や専門などを考慮し、また昇任であれば、それまでの研究・教育活動なども考慮し、専任教授による会議を開き、合議によって決している。

フランス文学科

本学科では、15名の専任教員（専任待遇の2名のフランス人教員を含む）が、教育・研究の中心的役割を担っている。その専門は中世から20世紀まで、文学から思想、言語学まで広範な領域をカバーしており、1学年150名～160名の学科において、おもにゼミを通し学生の幅広い関心に応えている。また、学外の一流の専門家との緊密なネットワークを有しているがゆえに、専任教員ではカバーしきれない学問分野の授業を提供できるシステムも構築しえている。年齢、男女比とも概ね満足のいく構成であり、また、教育補助員（Teaching Assistant。以下「TA」という）との関係や利用状況も良好だと言ってよい。今後は、こうした安定した組織が続く間は、おもに**学術研究機関として、教員間の連携を強めつつ成果をあげ、その成果を教育課程に反映させる努力が払われるべきだ**と思われる。また、教員の任用に当たっては、既に構築された人的ネットワークを頼りにしてきたが、今後、その限界が見え始める場合を想定して、公募制を取り入れるか否か議論を重ねる必要があるだろう。なお、**教員組織のあり方が、理想的な人材育成と、先端的な研究内容に直結するよう銘記すべきことは、いうまでもな**かろう。

日本文学科

「2-1学部等の理念・目的及び学部等の使命・目的・教育目標」の項目において述べるように、日本

文学科では、上代から近現代にいたる幅広い日本語・日本文学の素養を身につけると同時に、国際的視野に立って考え、日本文化を位置づけることのできる人材を育成することを目標としている。そのために、日本文学・日本語学・漢文学のすべての分野を網羅する、多くの教員によって学科を形成してきた。今後もこの質を維持すると同時に、より高い目標に向かって、新陳代謝を図ってゆくことが必要であろう。そのためには、**学科の教員相互の協力をより密接なものにしてゆくこととともに、新たな教員の任用にあたっては、年齢構成その他のバランスを考慮しつつ、有為の人材を積極的に見出し、招聘するための工夫が必要であり、さらに、専任教員の業績を相互に公平に評価する基準や体制を確立することが望まれよう。**また、具体的な課題としては、日本語教育を担当する人材の充実が望まれる。

史学科

現状では、比較的バランスよく専任教員が配置されているが、新たに立ち上げた芸術史コースに関していうならば、**日本・東洋分野の専任教員が1名しかいない点を、問題としてあげることができる。**史学科の専門領域が、時間的には、それこそ古代から現代まで、地域的にも、地球上の多くを含みこんでいることから、欲をいえばきりがいいことにはなるが、この点の整備が、さしあたり不可欠であり、定員増などでの対応が望まれるところである。

心理学科

本学科の目標、「心の専門家の養成機関として心理学を抽象的な学問ではなく、世の中に役立つ具体的知恵や実践的技術としての修得に重点をおく、まったく新しい学びの場を提供することをめざす」に基づき、**教員組織を構成することが企図されている。**

具体的には、基礎的知識と方法論を共有する心理学基礎領域、そして、応用や臨床領域を担当する教員を過不足なく配置し、履修者が心理学の多方面へのひろがりをもっと緊密に修得可能にすることをめざしている。また、限りのある専任教員の専門分野を適宜補完するため、また**時代のニーズに即応する有為な兼任教員の助力を合わせて柔軟な教授陣の構成に関する配慮も必要**であろう。